

21世紀は協同の時代

富沢 賢治

(一橋大学教授)

ロナルド・ドーアさんはイギリスの著名な社会学者で日本社会の分析でもすぐれた業績をあげている。日本語も達者である。過日、ドーアさんと日本語で雑談していたとき、冗談のように、「最近の日本社会はシジョーシジョーシュギですね」と言われた。私は一瞬とまどったが、「市場至上主義」のことだとわかり、大笑いするとともに彼の達者な日本語に舌をまいた。

市場はかつて「イチバ」と言われ、社会の一隅を占めるにすぎなかった。常設のイチバができる前は、毎月特定の日にイチバが開かれるにすぎなかった。ところが現在では市場はシジョウと呼ばれ、社会の隅々を覆うようになっている。市場とはものとサービスが価格をもって取り引きされる場である。ものとサービスが価格を指標として自由に取り引きされることによって有限のものとサービスの最適配分がなされるというのが、市場原理の核心をなしている。したがって、市場原理が有効に機能するためには自由な取り引きの障害となる規制を取り払わなければならない。こうして経済政策の基礎をなした自由主義が社会一般のイデオロギーともなっていく。

19世紀はこのような自由主義が時代を切り開く革新的な役割を果たした。しかし自由競争の放任は弱肉強食ともなり、種々の社会問題を生み出していった。これらの社会問題を解決しようとしたのが平等を原理とする社会主義であった。ロシア革命をはじめとする20世紀の多くの社会運動は平等を求める運動であった。しかしながら自由を否定するかたちでの平等の追及は経済活動での活力を欠くゆえに失敗せざるをえなかった。

自由至上主義も平等至上主義もそれだけでは社会運営の原理として不十分であることを歴史が実証している。欠けている原理はなにか。すでにフランス革命のスローガンが明らかにしているように、「友愛」である。社会運営の原理として自由と平等はともに不可欠であるが、自由と平等は「友愛」なしではうまく機能しないのである。

「友愛」というコンセプトについては歴史学のうえで種々の解釈があるが、現代の文脈のなかでより一般的な意味内容を探るならば、「連帯」あるいは「協同」というコンセプトにおきかえることが可能であろう。

そのように解釈するならば、自由と平等と協同が社会運営の三大原理となる。この三本足に支えられることによって社会はその安定性を確保できる。

19世紀は自由を追及した。20世紀は平等を追及した。21世紀は協同を追及する世紀となるだろう。自由と平等と協同のバランスのとれた社会運営はどのようなかたちでなされるのであろうか。

21世紀にかけて協同総合研究所が解明すべき一大研究テーマである。